

[14-3] 「ドンデーン村小学生の夢と現実」 野間 晴雄 著

野間氏には、滋賀大学の同窓会誌である『近江路』31号に^Fのような一文を寄せられました。この会誌の主たる読者は、小学校の先生達だそうです。

ドンデーン村小学生の夢と現実

— 東北タイ農村における児童の意識調査の集計結果から —

野 間 晴 雄

1. はじめに

1983年8月15日～10月1日までの47日間、私は京都大学東南アジア研究センターを中心とするタイ農村調査のプロジェクトに参加した。このプロジェクトの目的は、同大学の社会学の教授であった水野浩一博士が1964年～66年にかけて単独で調査した東北タイ・コ

ンケン県の一稲作農村であるドンデーン村の20年間の変貌を、学際的なチーム編成によって追跡することになった。第一次調査は1981年に行なわれ、中間報告もすでに刊行されて、

注1)
るが、今回はその補足と方法論のより一層の深化をめざすものであったといえよう。

ここで私が提示する資料は、昨年度の二次調査の際、村の小学校の3年生と6年生を対象として実施した簡単なアンケート形式による意識調査について、その一部を単純集計したものである。メインとなる調査の片手間に行なったものであり、また子供を対象とした調査は初めてのこともあって、決して満足のいく成果は得られたとはいえないが、以下に覚書き風に若干の知見を述べてみたい。

2. タイの小学校制度とドンデーン村小学校

タイにおける初等教育は、かつては寺院で僧侶から仏陀の教えと読み書きを教わるものであり、それも男子に限られていた。1921年ラーマ6世ワチラウット王のときに初等教育令が發布され、男女共学4か年の義務教育(プラトム)が始まる。当初は数か村に1校の割合で、寺院内に設けられ、その数か村を何年かごとに回っていたようである。ドンデーン村の寺に小学校が併設されたのは1924年で、1940年には寺から分離して現在地に移っている。1960年の勅令によって初等教育は尋常科4年と高等科3年(旧中学下級科3年を改編)の7年制になった。しかし、水野博士の調査当時は、村の子供のほとんどは尋常科を終えると家の農作業を手伝い、高等科やそれ以上の上級学校への進学は極めて稀であった。1978年には再び教育制度が改革され、日本と同じ6-3-3制が実施される。ドンデーン村の小学校も、それまでの4年制から6年制に切替わり、現在では適令期の児童の就学率はほぼ100%に近い段階まで達している。

注2)
1983年現在の児童数は186人で、6年生のみ2クラス、あとは各1クラスである。1クラスの人数は19~35人でばらつきが大きいのが、学年が下がるにしたがって児童数は減少している。これは近年の家族の出生率の低下によるもので、ビルを中心とした産児調節も村で広く普及していることの寄与も大きいと思われる。

通学区域はドンデーン村と、その分村である隣りのドンノイ村の2村で、いちばん遠い家からでも小学校まで15分とかからない。朝は8時30分から始まり午前中3時間、午後3時間の6限授業が各学年とも行なわれている。昼食は自宅に食べに帰る。しかし通常は両親が農作業

あるいは他の仕事で外にでており、子供だけでありあわせのもので食事をとることが多い。

1学期は5月1日～8月10日まで、2学期は8月26日～11月30日まで、3学期は12月16日～3月26日までの3学期制をとる。1・2学期の間は田植え休み、2・3学期の間は稲刈休みであり、夏休みに相当するのが3学期末にくる。

教員は校長を除いて10人、その平均年齢は30.4才である。うち女子は4人である。村に居住するのは3人で、そのうち1人は南タイの出身者で下宿生活をしている。他の教員はモーターバイクやミニバスを利用しての通勤者である。

カリキュラムは1・2年においては読み書きと算数で50%、残りの50%に理科・社会や道徳・音楽・体育にあたる科目が割当てられている。若干ではあるが、この時期に農業・家事等の実業教育もとり入れられている。3年生以上は国語・算数が35%で、実業教育が20～30%をしめるのが特色であろう。また5・6年生では英語が教授されている。

小学校の一日は国歌斉唱、国旗掲揚に始まり、教室内には王室の写真が必ず掲げられていることからわかるように、わが国の初等教育に比べて国家主義的な性格が強い。しかし戦前の日本のような硬直した国家主義ではなく、子供たちの日常生活におおらかに融和している。ただ私の印象では暗記重点主義がとられているためか、授業への反応はやや画一的にみえた。

3. 意識調査の分析

調査ははじめ校長・担任教諭に趣旨を説明したのち、児童への設問内容の解説はタイ人の大学生アシスタントによって行なわれた。回答者は3年生22名（男11人・女11人）、6年生22名（男13人・女9人）の計44名であるが、設問によって不備な回答はその項目のみ除外したため、各設問の総回答数は必ずしも一致しない。以下に設問ごとにその集計結果を略記する。

〔最も尊敬する人⇒表1〕

両親が32名で圧倒的な割合を示す。第2位は国王の10名で、教師・僧侶はわずかに1名ずつにすぎない。1965年に水野博士が59名を対象に行なった調査では、教師（最も身近な自村の小学校の教師を指すものと思われる）が6割近くを占め第1位で、両親の4割よりも^{注3)}多いとは対照的である。

〔上級学校への進学志向⇒表2〕

水野博士の時代には70%以上の児童が進学を希望しなかったが、昨年の私の調査では逆に70%の者が何らかの形で進学を希望している。その内訳をみると中学(3年制)9名、高校(3年制)7名で半数を占め、他は師範学校、農業学校、商業学校等の実業学校と大学である。現実にはこの村から4年制大学に通う者はだれもなく、短大レベルにあたる師範学校生が最高学歴である。しかし近年中学校への進学率は急増しており、村から20km余り離れたコンケン市(人口約10万、東北タイの政治的中心地で、県庁所在地)や、ターブラ、コース^スといった10~25km内外の小地方町の上級学校への進学者で、毎日のミニバスや乗合バスは超満員である。

〔将来就きたい職業⇒表3〕

3年生・6年生の学年別にみると、農民になりたいと答えた者が両学年とも最も多いが、いずれも半数に満たない。3年生では教師が9名で第2位を占め、うち8名までが女子である。男子は警官・軍人への希望が多く、6年生では第2位を占める。世帯^{セタイ}世帯調査による世帯主に対する質問では、自分の子供・孫をどんな職業につけたいかの希望は、教師が第1位で、息子に対しては35.9%の親が、娘に対しては39.0%の親が回答している。以下、息子に対しては警官24.4%、公務員7.3%と続き、娘に対しては、看護婦25.5%、農民15.0%、医者8.3%の順となる。このような親の期待と、子供自身の希望は多少のギャップがあるものの、農民への執着は両者とも薄いことは注目される。

〔自村への永住希望⇒表4〕

学年別にみても、男女別にみても、77%~95%以上が結婚後は自らが生まれた村への居住を希望している。女子の方がより比率が高いのは妻方居住制が原則であることにも因らう。また年令の高い6年生の方が「はい」と答える割合が多く、村への愛着はより強まっているといえよう。しかし現実には男は得度のため、仕事のために結婚前に村外居住を体験することが多くなってきている。これは男の“冒険”というべき性格をもっており、故郷放棄にはつながるものではないようである。

〔もし自村以外に住むとしたらどこに住みたいか⇒表5〕

前の質問で「はい」と答えた児童に対しても「強いて住まなければならないとしたら、どこを希望するか」というニュアンスの居住選好を聞くつもりであったが、私のアシスタントへの説明不足で無効回答が18もあったため、確実な傾向を指摘することは差控^{サコ}えたいが、バンコクが1位とはならず、この村に近接したコンケンが首位を占めていることは興味深い。特に、

3年生の4名に対し、6年生が4倍の12名におよぶことは、実質的な意味においてもコンケンが村の子供たちをひきつける都市であることを推測させる。

政府は、ベトナム戦争を契機としてアメリカとの協力によって、東北タイに重点的な経済開発・軍事施設の建設を行なったが、その中核となった都市がコンケンであり、他の東北タイの都市において雇用機会や娯楽施設・商業機能が卓越していることも一因と推定される。水田の開発の歴史はドンデーン村よりも古い⁴⁾が、近くに大きな雇用機会を有しない村に比べて、rural-urban 移動が少ないように思われる。遠くの大都市よりも近くの都市コンケンの魅力が強いのであり、前項の質問での自村の永住希望の高さの裏返しとも読みとれる。

〔好きな遊び⇒表6〕

学校教育における西欧化の影響が顕著にみられ、バレーボール(女子)・フットボール(男子)が両学年とも人気1位を占める。また両学年ともかなり複雑な“ゲーム”(ルールにのっとった自発的・競争的な活動)が圧倒的な優位を占め、“プレイ”(ルールのない非競争的活動)にあたるものは「花摘み」(その他の項目に入る)1名にすぎない。中央タイ・サムートサコン県農村における子供の遊びの社会学的調査では、場所・時間などの外的条件の影響をうける遊びと、うけない遊びの2分類が試みられているが、表6にあげたものはすべて前者の範疇^{注4)}に入るものであり、とりわけ小学校の校庭が遊びの主要な場所となっている。男子に人気の高いタクローはタイ式の“蹴まり”で、バレーボールのように相手側コートへ配球しあうゲームである。「ゴムとび」は導入の歴史が10年内外と新しく、一説には日本からの移入といわれている。「かくれんぼ」と並んで用具をほとんど使わない手軽な遊びで、女子の嗜好がより強い。

この質問はこちらで選択肢を与えず自由記入式によるものであるが、娯楽としてはこれらの「遊び」がすべてではない。児童たちには「遊び」とは別のカテゴリーと考えているかもしれないが、テレビ視聴は6年前に電気がひかれてから、消費時間としては急速に、非差別的に娯楽の上位に入ってきたことはまぎれもない事実である。学校がひけた夕刻には、村の「よろず屋」のテレビの前には、乳児をあやす母親にまじって、かじりつくように子供たちの人だかりができるし、夕食後のゴールデンタイムしかりである。3年生の回答者に農閑期で、学校のあたる日と、休日各1日ずつ1日の行動を記入してもらったが、そのうち正しく記入できた7名のウィークデーの平均視聴時間は1時間、休日には3時間10分に及んでいる。

〔子供の労働に対する好悪←図1・図2〕

注5)
人口過剰な開発途上国では、子供は重要なしかも最も安価な労働力である。その定量的把握や、オスカー・ルイスの『貧困の文化』・『サンチェスの子供たち』にみられるようなモノグラフによる生き生きとした描写は今後の課題として、ここでは、労働に対する子供たちの意識を、好き嫌いという指標でもって垣間みよう。

子供たちの労働で最も普通的なのは、水牛の世話・水汲み・調理手伝い・農作業・魚つり・子守り・野生食用動植物の採取・そうじなどである。そのうちから5つの「仕事」を選んで、各人に「好き」か「きらい」までの5段階評価をさせた。それぞれの学年別の回答分布が図1で、「大好き」に5点、以下「大嫌い」までに4、3、2、1の素点を与え、それを合計した得点を示したのが図2である。

どの労働に対しても嫌悪感はなく、概して楽しいものとして行動している様子が読みとれる。学校を帰ると両親が働く野良に出かけ、いっしょに水牛・牛を追いたてて自宅に帰る光景をよくみかけるが、両親よりも前をさっそうと水牛にまたがり手綱をもつ男の子が多かったのは印象的であった。農作業では耕起・代かきを除いてほとんどの仕事を小学校の5-6年生になるとこなすが、家族との対話・出小屋での共食が楽しさを支える大きな要因と私は考えている。これに対し、井戸からの水汲みは専ら子供の仕事とされる家が多いが、自分1人で汲み上げ運搬をしなければならない力仕事のため、実質的にまかされている6年生では「好き」の比率が低下する。また女子は母親の調理の手伝いをするのが男子に比べ多いが、必ずしも好きな労働ではないようだ。魚つりは男子においてきわめて高い比率で「大好き」な仕事である。獲物がおかずになる点では確かに労働であるが、多分に娯楽的要素もあり、夕暮れ時にあるいは日没後まで、水田の畦畔に竹ひごで作った釣具を何本もつきさしているのは、8割方小学生の男子であった。

結びにかえて

われわれの調査隊の一人が村の子供のくらしをみて「次郎物語の世界だ」と評した。すでに日本では失なわれてしまった純朴さがまだふんだんに村の子供たちにはある。いっしょに田んぼへでかけると、その道すがら野生の「食べられるもの」をすばやくみつけるめざとさ、動植物名の豊富な知識、etc ……。だがこの「のどかな世界」にも近代化の波は確実に押し寄せ

てきている。物価・情報が豊かになり、教育が普及するなかで、小学生の意識のなかにも急速に「まち」の生活が入りこんできている。その“免疫”をうんぬんする時ではもはやないかもしれない。それだけに一瞬、あの村の大人たちの、親しみのある律気さを、子供たちが生活の向背という名目によって失なってしまうのは私だけの身勝手であろうか。ドンデーン村の子供たちに短い期間ではあるが接してみて、それが私のとりこし苦労であったような気がするのだが。

◇ ◇ ◇

すでに与えられた紙数を超過している。ここでは単純集計データの提示にとどめ、他日、子供の労働力としての意義にからめて、このアンケートの語る意味を吟味・考察してみたいと思っている。

(1983年1月13日記)

(滋賀大学講師)

- 注1) H. Fukui, Y. Kaida and M. Kuchiba, A Rice growing Village Revisted : An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand, 1983.
- 注2) はかに有料(年間150パーツ≒1500円)の幼稚園にあたるクラスが1つ併設されている。
- 注3) 水野浩一「タイ農村の社会組織」, 1981.
- 注4) Wannu Wibulswasdi Anderson, Children's Play and Games in Rural Thailand: A Study in Enculturation and Socialization, 1980.
- 注5) B. White, The Economic Importance of Children in a Javanese Village, in Moni Nag ed, Population and Social Organization, 1975 など。

表1 最も尊敬する人は誰か

	1965年	1983年
教師	3.5 (59.3)	1 (2.3)
両親	2.4 (40.7)	3.2 (72.7)
国王	-	1.0 (22.7)
僧侶	-	1 (2.3)
その他	-	0 (0.0)
調査児童数	59	44

()は%

表2 上級学校に進学したいか

	1965年	1983年
はい	4.2 (71.2)	1.3 (29.5)
はい	1.7 (28.8)	3.1 (70.5)
()	-	9
内 中 学	-	7
高 校	-	4
上級職業学校	-	3
中級職業学校	-	8
大 学	-	

()は%

表3 将来どんな職業につきたいか(1983年)

	3 年	6 年
農 民	7	9
官 公 員	3	0
商 人	1	0
軍 人	2	7
教 師	9	1
医 者	0	1
看護婦	0	2
建設労働者	0	2
調査児童数	22	22

表6 好きな遊び(上位3種) (%)

	学 年		性 別		全児童
	3 年	6 年	男	女	
ランニング	21.1	12.2	11.2	24.5	16.5
ゴムとび	9.6	6.5	4.2	13.8	8.0
かくれんぼ	5.3	8.1	5.6	8.5	6.8
バレー	19.3	21.1	16.1	26.6	20.3
フットボール	21.9	25.2	30.8	12.8	23.6
けんけん	6.1	0.0	4.2	1.1	3.0
タクロー	10.5	20.3	24.5	2.1	15.6
その他	6.1	6.5	3.5	10.6	6.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

1位=3点 2位=2点 3位=1点 による得点合計の割合を示す

表4 将来結婚したらドンデン村に住みたいか (%)

	学 年		性 別	
	3年	6年	男	女
はい	77.3	95.5	83.3	90.0
いいえ	22.7	4.5	16.7	10.0

表5 ドンデン村以外に住むなら、どこに住みたいか

1. コンケン	15人
2. バンコク	7
3. コースム	3
4. ドンハン	1

他にドンデン村と答えた者18人

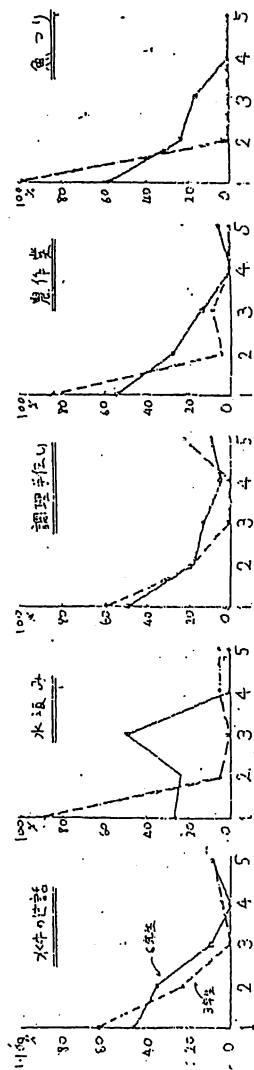


図 1. 労働に対する割合 (1=水仕事 2=調理 3=洗濯 4=魚料理 5=魚料理)

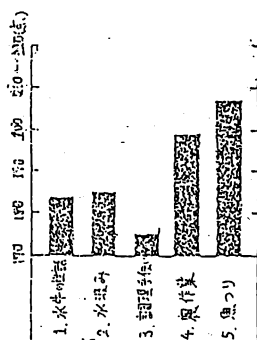


図 2. 労働の割合についての割合